北海道の元気！NPO訪問

31 NPO法人 いぶりたすけ愛

市民の相互扶助の拡大が安心社会をつくる
誰もが社会起業家になれる場づくり目指す

文・加藤知美

◇ 互助と福祉の新たな複合拠点がオープン

高齢者も障がいのある人もみんなで社会起業家になろう、を合言葉に、ものづくりやカフェを展開している「NPO法人いぶりたすけ愛」を登別に訪ねた。長年続けてきた互助活動と介護保険事業を通じて、高齢者、障がい者自身が社会貢献しようという意欲が地域を変えるとの確信から踏み出した新事業だ。

共に夢をかなえようの気持ちから「ともかな」と名付けられた新しい施設は二〇一一年五月にオープンしたばかり。コミュニティカフェレストラン、駄菓子屋、子育てサロン、手作り作品の販売、ものづくりスペースなどが一階にあり、二階はひとり親家庭の住まいとなっている。毎日市内など近隣から親子連れ、小学生、高齢者など地域の人がやってきて出会いを楽しんでいて、明るい笑い声が響いていた。

レストランはワンデイシェフ方式で、八組が交代でそれぞれに特徴のあるランチを提供している。織物や木工、クラフトなどのものづくり部門は四ブランドでスタートし、半年あまりで一三ブランドに増え、販売や講習が行われている。子育てサロンのスペースでは、社会の宝である子どもが健やかに育ってほしいとの願いをこめて立ち上げた「ともとも」のメンバーが子育て中のママを応援してくれる。

一方、隣接する同じく二階建ての「たすけ愛の家」は、NPOの福祉サービスの拠点と、高齢者の自立と共生をめざすグループリビングの住居からなっている。配食サービスのための厨房もあり、日当たりの良いサロンスペースや掃除の行き届いた共有スペースなど居心地が良さそうだ。

様々な活動が複合的に展開されているが、互助活動によって自律する市民が心豊かに安心して暮らせる社会を創出したい、という強い思いはブレることなく一貫している。

設立のきっかけは理事長の星川光子さんの二〇年近く前の体験に遡る。知人の誘いに応じて参加したボランティア活動で、寝たきりの高齢者が月に一度しか入浴できないことに衝撃をうけた。そんな福祉の現状を嘆いても解決にはならず、市民自らが無関心をやめてできることをしないといけないと気づき、さわやか福祉財団の研修を受けて、地域で支えあうふれあいボランティア活動のしくみを学んだ。その後まもなく、仲間とともに「登別ライフケアを考える会」を立ち上げ、会員の互助による在宅サービスを始めた。今から一七年前のことだ。登別市総合福祉センターの社会福祉協議会の一角に机ひとつを借りてのスタートだったが、中古車を購入して病院の送り迎えなど活動を広げ、一年後にはアパートを借りて拠点とし、民間助成金により新車を入手し、パソコンやファックス機をそろえるなど自立した運営をめざした。NPO法施行と同時に法人格取得申請を行うなど組織体制を整えた。

「たすけ愛の家」（左）と2011年
５月オープンの「ともかな」（右）

◇ 地元で在宅で最期まで―グループリビングの発想へ

介護保険制度が二〇〇〇年に開始されることが決まると、すぐに介護保険サービスを実施する準備にとりかかった。現在、介護保険サービスを「優サービス」と名付けて訪問介護やケアプラン作成などを行う一方、介護保険外の活動を従来に引き続いて「たすけあい事業」として取り組んでいる。拠点を一軒家の事務所に移したことを機にサロンを開設し、ここで昼食と送り迎えつきでカラオケやマージャン、囲碁などを楽しめるようにし、地域の人たちが多く参加してくれた。この食事づくりが後に配食サービスへと発展していった。

こうした活動を続けているうちに、住み慣れた地域で在宅で最期まで暮らせたら、との思いが募った。いろいろなサービスのメニューをそろえてもなかなか最期まで暮らせないのが現実だった。北海道の住宅事情として段差が多いことや、子ども世帯が首都圏という人が多いために、登別を離れて引っ越す決意をする人が少なくない。そこで、地元のバリアフリーの住居で仲間と一緒にずっと暮らせる方法としてグループリビングの開設に思い至った。

駄菓子屋はグループリビングの住人がオーナー。高齢でも起業家です。

二〇〇六年、現在地に木造二階建て、バリアフリーの「たすけ愛の家」を新築し、ミニキッチンなどを備えた一五畳の個室を九室用意し、現在は平均年齢八五歳の九名が住んでいる。昼食と夕食は配食サービスの食事を食堂でとり、日中はサロンに参加して俳句やカラオケなどを楽しんだり、デイサービスに通うなどして過ごす。九名で構成する自治会としてお隣の「ともかな」で駄菓子屋を開いたので、店番や紙袋づくりなどに精を出す人もいる。NPOの理事長やスタッフが入居者の様子を気にかけながら同じ屋根の下の事務室で仕事をするが、基本的には介護サービスなどを利用しながら自立した生活を送っている。

◇ 広がる能動的市民の相互扶助の輪

たすけ合いの輪を徐々に広げてきた結果、現在の会員数は八四〇名にのぼる。会員はサービスを受けることもできるし提供する側にもなれる。一時間六〇〇円の有償ボランティアをチケット制で依頼することになり、料理や掃除、草取り、ガラスふき、通院・入院時の見守りなどの利用が多い。

法人全体の年間の総事業費は五〇〇〇万～六〇〇〇万円ほどで、約半分は介護保険事業の優サービス、残りはたすけあい事業やグループリビングの家賃収入などだ。建物は法人が所有するが、助成金や補助金を上手に活用した結果である。グループリビングと法人事務所がある「たすけ愛の家」は競輪補助事業の助成金によるもの、「ともかな」は登別市役所の勧めで共生型基盤整備事業の補助金により三〇〇〇万円の建設費と三〇〇万円の設備費を得てつくられた。

さらに、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成で一年間かけて「ともかな」の設計や道内外への視察、運営体制の検討などを実施した。設計にあたっては地元の専門学校生が力を注いだ。

「あなたの「たすけ」はわたしの「たすけ」」を合言葉に市民互助の活動を続けたなかから、市民がもっと能動的に地域課題を解決したり社会貢献をしなければならない時代になっている、との実感を得て、高齢者や障がい者も社会的起業家になり、さまざまな主体が自由に集う「居場所」となる場をめざして「ともかな」はスタートした。互いを気遣いながら共に夢を叶えるために集まる場の今後の広がりが期待される。

子育てサロンスペース。壁いっぱいの絵や隣の部屋が覗ける小さな窓など工夫がいっぱい。

◆ NPO法人いぶりたすけ愛
所在地　登別市桜木町3丁目2－10
TEL　0143－88－2626
WEB　http://blog.goo.ne.jp/iburitasukeai